

2 令和元年度研究について



(1) 研究の内容 (平成30年度からの継続)

ア 研究の目的

○地域社会と連携協働した教育活動を展開し、教育の目的とするところを共有することとおして、地域社会のなかに、特別支援教育や障害のある児童生徒の能力や可能性について共感的な理解が広がっている。

○上記の目的を達成するために、授業改善に取り組むことから、多様な児童生徒一人一人に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための力を育むことができている。

○これらをとおして、共生社会が理念だけではなく実感をともなったものとして広まってきている。



社会貢献という言葉については、この意味を共通理解するために本校では「自分らしく社会貢献すること」を以下の4点の項目で整理し、この視点をよりよい授業づくりにつなげるよう活用してきた。

- ・この世に生まれてきて、存在していること
- ・自分のもっている力を精一杯使って生活すること
- ・人との関わりやつながりのなかで、何らかの役割を得ること
- ・共生社会の形成に影響を与えること

京都府教育庁指導部特別支援教育課指導主事からは、本校が整理したこれらの社会貢献の姿を実現するにはどのように取り組めば良いのか助言を得た。

- ・児童生徒それぞれの立場や環境のなかで、どのように社会貢献していくのかを考えること
- ・色々な形の自立があることを踏まえること。また児童生徒の可能性を考えながら実践すること
- ・人とのつながりの中で何らかの役割を得ることは、他人の力を借りることもあること
- ・何より、自分のもっている力を精一杯生活の中に生かすことが重要であること

研究2年目は平成30年度研究まとめを引き継ぎ、取組内容と方法をさらに具体的にし、事例から検証することで研究の目的を達成することとした。

イ 取組内容

<内容>

- ①障害のある児童生徒の社会貢献を実現する、地域社会と協働した教育活動の在り方について
地域社会における人的・物的な資源と授業をつなぎ、教育の目的とするところを共有することから、障害のある人を含む多様な人々の社会貢献の在り方を検討し、教育効果が見込める学習活動を展開する。
- ②社会貢献を実現するための指導の在り方について
児童生徒が能力や可能性を最大限発揮するための指導の在り方について、指導のねらいと評価等に関する実践研究を行う。
- ③社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて
児童生徒の能力や可能性を最大限育成し、社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントに取り組む。また、学部間や社会への移行を想定した学びの連続性を教育課程において可視化する。
- ④特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について
授業改善研究、教育課程研究を中心に取り組む本研究を学校経営と一体化させる。

<方法>

- ①年間指導計画の作成と実施
- ②教科・領域等関連表の作成
- ③授業改善シートの作成と活用
- ④児童生徒の変容エピソードの記録
- ⑤地域社会とつながる教育活動の積極的实施
- ⑥年間をとおした全校での授業改善研究の実施と、研究協力者による授業評価
- ⑦保護者評価や外部評価を得る仕組みづくり

(2) 研究の成果

ア 障害のある児童生徒の社会貢献を実現する、地域社会と協働した教育活動の在り方について

地域社会における人的・物的な資源と授業をつなぐことから、教育の目的とするところを共有し、障害のある人を含む多様な人々の社会貢献の在り方を検討し、教育効果が見込める活動を展開した。

(ア) 校務分掌「地域社会連携部」を中心とした取組の推進

平成 30 年度研究まとめ「社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメント」で述べたとおり、児童生徒の能力や可能性を最大限育成し、社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントのポイントとして、「③学校内外の人的・物的資源の効果的な活用」がある。「地域社会連携部」が地域社会と協働した教育活動の推進役を果たすことから地域社会と関連づけた授業や、直接的に地域展開しなくても共生社会で生きる視点をもった授業を創造することが可能であると考えて取り組んだ。多くの生徒が高等部卒業後に地域社会に出ていくことから、新学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」の趣旨に合わせ、地域社会をもう一つの教室として捉えて計画する「地域を知る・学ぶ取組」「将来の生活の質を高めることにつながる取組」「地域に障害のある児童生徒の理解を広げる取組」を積極的に推進した。また、小中高校生に地域社会とつながることの重要性を考慮し、地域社会の方に児童生徒の様子を見て知っていただくだけでなく、授業のねらいも知っていただき、そのねらいのもとで共に取り組むことで、共生社会の実現について一緒に考える機会としてきた。

また、地域社会の方々が多様な形態で授業に携わってくださることで、多様な視点や切り口から授業を捉えることもでき、私達の指導の充実と授業改善にも有効となっている。

このように昨年度よりも取組を深化させることができた。以下に各学部の事例を述べる。

(イ) 「地域社会連携部」の機能を活用した各学部の取組

中学部の生活単元学習「西国街道歩き」では、「長岡京市神足ふれあい町家」の協力を得て、国語、社会、数学、職業・家庭、自立活動の教科や領域の目標と内容を取り扱う学習を実施した。生活圏内にある身近な道を「西国街道」として学習し直し、乙訓地域と他の地域のつながりを理解したり、西国街道沿いにある江戸時代末期に建てられた伝統建築の町家から現代に名残のあるものを探したりするという

地域を知る・学ぶ学習である。この学習では、友達や指導者だけでなく地域の方と共に考えることにより、一つ一つの知識がつながる面白さを感じたり、新しい発見や色々な発想が生まれたりすることとなり、実際の生活や社会で生かせる知識や技能を身につけることができた。



高等部の作業学習「農園芸」では、「花いっぱいボランティア」の御協力で、長岡京市立長岡第三小学校において、園芸のボランティア活動を実施した。地域社会の方の指示で共同作業を行うことで、働くというイメージをもつことができ、自分の行動を振り返り自己改善しながら学習を深めることができた。この授業は、未知の状況にも対応できる思考力、判断力や、学んだことを今後に生かそうとする力を育てたという点で、将来の生活の質を高めることにつながる学習となった。また、会の方の「一生懸命働いてくれる」「ここでできたことを自信にしてくれたらよい」という言葉から、地域社会に障害のある生徒の社会貢献の可能性への理解を広げる取組にもなった。



小学部全学級で実施した遊びの指導「竹と遊ぼう～水遊び～」は、色々な形の竹の扱いを経験したり、遊びをとおして地域社会の方との交流を深めたりすることを目的とし、「長岡京市環境の都づくり会議」の御協力で実施した。中庭全体を使ったダイナミックな設定で、竹シャワーやししおどし、竹の水鉄砲、流しそうめんならぬ流しボール等の装置への興味が原動力となり、地域社会の方に積極的に関わった児童も多かった。会の方の「一緒に〇〇ができた」「子ども達が喜んでくれるのが嬉しい」「子ども達から元気ももらえる」という言葉から、児童への共感的な理解につながる「喜びをともにする授業」となっていると考えている。

地域社会と連携協働する授業には、全ての人それぞれの良さを生かしながらかつなぎ合う共生社会の実現への方向性があると改めて感じた。

教職員からも「地域とつながる授業を実現するだけでなく、共に授業を創り、喜び合うことが大切だと再認識できた」「地域社会



の方の声は、社会の素直な声でもあるというとても大切なことに気づいた」「地域で、地域のことを、地域社会の方と共に学ぶ取組が、卒業後に地域で、地域と共に、やりがいや生きがいをもって生活することができることにつながると考えるので、今後も『喜びをともにする授業』に向けてよりよく改善したい」「地域社会と連携することで、子ども達に何を学ばせるかを明確にするかだけでなく、学びを地域社会と共有することも大切だと思った」という声が上がってきた。

このように、地域社会と連携協働した教育活動の成果は児童生徒の姿の変容だけでなく、地域社会の方々や教職員の意識の変容としても表れた。

イ 社会貢献を実現するための指導の在り方について

児童生徒の能力や可能性を最大限発揮するための指導の在り方について、指導のねらいと評価等に関する実践研究を行った。

(ア) 授業改善シートの作成と活用

授業改善シートを作成し、授業の単元化、教科・領域別の指導と各教科等を合わせた指導の関連等の検討に取り組んだ。前単元とのつながりや、本単元でついた力と次の単元でつきたい力を整理し、単元の連続性を視覚化するようにした。また卒業後を見据えて、どのような力をつけておきたいのか、それにはどのような教科等の視点が必要なのかを検討するために、見直しと活用を繰り返した。

(イ) 研究協力者による授業参観と授業評価

研究協力者（立命館大学産業社会学部 青山芳文教授）による授業参観と授業評価を実施し（平成30年度、令和元年度共に全学級で実施）、研究協力者による授業評価を以下の4点にまとめ、全校で共有しながら授業改善に継続して取り組んだ。

①児童生徒がわかって動ける授業づくり

（T1・T2の役割分担、「主体的・対話的で深い学び」の視点）

②適切な実態把握と目標の設定

（発達や障害の視点、生活年齢の視点、教科をとおして文化を教える視点）

③地域社会とのつながり

（社会参加・社会貢献の視点、将来に生きる視点）

④教育課程の改善

（単元をつながり、教科の視点、目標と評価の観点の必要性）

また、今年度の継続した授業改善の取組のうち、上記①②について、青山教授から以下のように助言を得た。

①児童生徒がわかって動ける授業づくり

（T1・T2の役割分担、「主体的・対話的で深い学び」の視点）

- ・「わかって動ける」とは、指導者の思惑どおりに動けたことに対する評価ではなく、自分で判断してできたということへの評価である。指導者のやりやすさではなく、本人のわかりやすさのための手立てを検討すること
- ・児童生徒が活動を続けられる理由は興味だけではない。活動内容（動き）、自分なりにできたという気持ち（自己肯定感）、別の場面でもその力を発揮できたという経験（達成感）があるかどうかである。

- ・「わかって動ける」というベースができると、次は友達のことを見る等して様々な情報をキャッチすることができる。他者への関心も芽生え、その結果主体性が生まれている。
- ・指導者から児童生徒一人ずつへの評価が他の児童生徒にも伝わる場所から対話的で深い学びが始まる。

②適切な実態把握と目標の設定

(発達や障害の視点、生活年齢の視点、教科をとおして文化を教える視点)

- ・授業の目的、意図、発達段階に応じた学習内容の設定と、評価の設定の重要性。授業評価は1時間の授業終了時にするものではなく、授業中と授業後の休み時間、そして単元終了後にできるものである。
- ・頑張ったこと＝できたことではなく、学習の経過が重要である。児童生徒が臨場感をもって学習に取り組めたか、休み時間にも楽しんでやっているかという姿こそ主体的な姿である。
- ・指導者は児童生徒にとって仲間であり、「なりたい自分」という憧れの存在でもあることを知っておくこと

(ウ) 全校研究会 外部講師による講演

(東京都立石神井特別支援学校 指導教諭 海老沢穰氏の講演)

将来にわたる変化を世界的な視野で捉え、その中で「日本がどういった立ち位置にいるか」や、「新学習指導要領ではどのような教育をしようとしているのか」等について学んだ。また、東京都立石神井特別支援学校における ICT 機器を活用した授業の目的や児童生徒の変容について、具体的に学んだ。

- ・ Society5.0 (第 4 次産業革命) にむけた人材育成について
社会が変化すると学び方も変える必要があること
- ・ 2030 年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」(SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS-世界を変えるための 17 の目標-)の取組について
- ・ 新学習指導要領のキーワードや、EdTech(エドテック)のもたらす「学びの個別最適化」「学習者中心の学び」について
- ・ 教師に求められる新しい専門性「チェンジ・メーカー」「アクティブラーナー」「ファシリテーター」について

ウ 社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

児童生徒の能力や可能性を最大限育成し、社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントに取り組んだ。また、学部間や社会への移行を想定した学びの連続性を教育課程において可視化することに取り組んだ。



① 学びの連続性の観点から、生活年齢等に応じて異なる社会貢献する姿の検討



小学部では、年間を通じて「地域を知る」授業（生活単元学習「9組報道局」）に取り組んだ。自分を知る、友達を知る、先生を知る、学校を知るという校内の取組から、地域探検、調べ学習、新聞制作と学習の場を地域社会に広げ、意欲を引き出し、主体的に活動に向かう姿を目指す取組で

ある。生活、国語、算数、図画工作という教科の目標と内容を取り扱うことと併せて、集団の一員として活動に参加すること、自分もっている力を学級の中で発揮すること、得意なことを生かして自己有用感を共有すること、役割があることで達成感を味わい自信につなげることを目標とした。インタビューができる児童、メモが取れる児童、写真撮影や動画撮影ができる児童と、それぞれが「精一杯自分のもっている力を使い」、「人との関わりやつながりのなかで何らかの役割を得る」という小学部という生活年齢における一つの社会貢献の姿を追求した。また、上手くできた友達を褒める、友達をフォローする等、児童同士が関わり合い、共感し合うことから、喜びを共にする姿も見られた。



中学部では、生活単元学習「春みつけ 出会いを大切に」に取り組んだ。将来の豊かな生活に向けて ICT を活用した視覚、聴覚、臭覚、身体に働きかける授業を設定した。この単元では、「出会い」をテーマに友達や先生の写真撮影をしたところ、生徒自らがタブレットで写真を撮影することで人との関わりが生まれ、撮影する喜びと同時に、誰かと一緒に写真に写る楽しさや喜びも知ることができた。

次の生活単元学習「プロジェクションマッピング
～光で花を咲かせよう～」では、教室の壁に映像を
投影し、クラスメイトの力を合わせてデジタルの花
を咲かせたり、スイッチを使ってデジタルのランタ
ンを飛ばしたりした。「肢体不自由があるから○○で



できない」という指導者の先入観によるリミッターをなくし、「こうしたらできる」と様々な手立てや教材を考えることができていた。そして生徒は自分がアクションを起こすことで空間を変化させることを体感することができた。少しの活動で大きな変化を生み出せる ICT 機器活用のよさをできる限り生かすよう環境を整備することから、生徒自身が「こうしたらこうなる」ということをわかりながら「精一杯自分のもっている力を使い」、「人との関わりやつながりのなかで何らかの役割を得る」という中学部生徒としての一つの社会貢献の姿を追求することができた。

高等部の作業学習「農園芸」では、「体力
(仕事を休まない/働き続ける)」「場に応じた
コミュニケーションや態度(挨拶/返事/報告/敬語
で話す)」「基本的な生活習慣(身だしなみ/時間
を守る/準備から片付けまでを行う)」「安全の
意識(道具を正しく使用する/周囲への配慮)」



「集中して作業に取り組む」の五つを基本とし、主体性や責任感を育てることを重要視して取り組んでいる。前述の長岡第三小学校における活動では、作業学習の農園芸の授業で学んだことを生かし、「花いっぱいボランティア」の園芸ボランティアさんの手伝いを行った。

園芸ボランティアさんに教えていただきながら、畑の整備やプランターの苗植え等の作業を行うなかで、説明を聞く態度、作業の仕方、質問の仕方、友達との協力等の力を付けてきた。作業中や作業終了後、小学校の児童から「ありがとうございます」と感謝され、園芸ボランティアさんから「ありがとう」「助かった」と役に立つ存在としてあてにされる経験は、「精一杯自分のもっている力を使い」、「人との関わりやつながりのなかで、何らかの役割を得て」、「共生社会の形成に影響

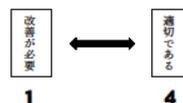


を与える」という高等部という生活年齢の一つの社会貢献の姿を追求したものと考えられる。このことから、地域にとっても生徒にとっても役立つ活動 win-win の活動にすることが重要であると考えられる。

②学びを計画的に積み上げるための年間指導計画のさらなる充実

年間を見通した指導を推進し、授業の単元化、教科・領域別の指導と各教科等を合わせた指導の関連を検討するために、平成30年度に取り組んだ年間指導計画の作成等の取組を今年度はさらに充実させることとした。年間指導計画に加え、教科・領域等関連表や授業改善シートの作成は、教科等横断的な視点や、単元間のつながり(学習の積み上げ)をこれまで以上に意識することになり、教育課程改善表の作成と併せて教育課程改善の実施・評価・改善という評価改善システムの確立を進めることができた。教職員からも「教科・領域の関連はこれまで意識しにくかったが、教科・領域等関連表はそれを意識できるツールとなった。授業改善を進め、児童生徒の可能性を最大限広げられるよう実践する。」という声が上がってきた。

＜令和元年度 教育課程改善表＞〇〇学部△組



評価項目	①週時程表における授業時間数は適切であったか	②週時程表における授業の配置は適切であったか	③その他（振り返り時に参考になること、改善点） ・基礎・基本的な知識及び技能の確実な内容であったか ・思考力、判断力、表現力等の育成を図れたか ・主体的に取り組める学習内容であったか
<教科> 単元名	1・2・③・4	1・②・3・4	*
<教科> 単元名<>	1・2・3・④	1・2・③・4	*
<教科> 単元名<>	1・2・3・4	1・2・3・4	*
<教科> 単元名<>	1・2・3・4	1・2・3・4	*
<教科> 単元名<>	1・2・3・4	1・2・3・4	*

③新学習指導要領の研修（京都府教育庁指導部特別支援教育課指導主事の講義）

と、その趣旨を生かしたさらなる授業の工夫

- ・「資質・能力の3つの柱」「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善」「カリキュラム・マネジメント」など、新しい学習指導要領における重要な点の全ての基盤となる考え方が「社会に開かれた教育課程」であることを理解した。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、必要な教育内容を明確にしながら、社会との連携協働によって学校教育の実現を図ることを目指すべく各取組を実施していることを確認した。
- ・「生きる力」の育成と、資質能力の育成については、「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性等の涵養」の三つがバランスよく、偏りなく教育活動として取り組めるようにすることが重要であることを理解した（「何ができるようになるのか」）。
- ・「資質・能力の3つの柱」に沿って再整理し、当該教科等の目標と内容として明確化することが重要であることを理解した（「何を学ぶのか」）。
- ・上記の「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」の視点において、本校で作成している教科・領域等関連表の作成には大きな意味があることを評価された。
- ・何のために、どのように改善しようとしているのかを明確に、学校組織全体で取り組み、外部評価も得ていることへの評価を得た。授業改善は児童生徒の変容から検討し続けることが重要であることを理解した。

エ 特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

本研究をスクールマネジメントプランの中核に位置付け、学校経営と授業改善研究、教育課程研究を密接につなげながら歩んできた。

①地域社会連携部の活動の定着

地域社会と協働した教育活動の推進役として校務分掌に位置付けた地域社会連携部の機能が定着し、地域社会と関連づけた授業、地域社会と連携協働した授業を各学部で実施した。

②広報等発信の充実

自分らしく精一杯力を発揮している児童生徒の姿を地域社会に伝えるため、広報情報教育部が中心となり、ホームページ（月平均 20 回更新）・Facebook（期間限定/毎日記事更新）・校門前掲示板（平均月 1 回更新）・コミュニティ放送局出演（FM おとくに 862）・新聞掲載（各紙にプレスリリース）を活用し、積極的な情報発信を行ってきた。



③学校評議員会議の活用(学校評議員による評価の活用)

「数年前よりスクールマネジメントプランが非常に読みやすく、わかりやすくなった。努力されていることを全体的に評価する。」「取組をとおして地域を変えていくという意味では、比較的若い年代とのつながり、理解が重要になってくるのではないか。」「地域の方との協働の実践について、今後も幅広い世代の方との取組を進めてほしい。」等の評価を得ている。こうした外部からの評価を受けて学校経営をさらに進め、また、継続した評価を得ることとしている。

④授業参観時における「授業参観ガイド」の配布と、「参観アンケート」の実施

「Ⅱ-1 平成 30 年度研究について」学校祭アンケートの結果で述べたとおり、「特別支援学校でどのような授業をしているかがわかった」という質問に対する回答は「あまりよくわからない」が 13%、「わからない」が 1%であった。「地域社会と連携した授業に取り組んでいることがわかった」という質問に対する回答は「あまりよくわからない」が 18%、「わからない」が 2%であった。学校評議員会議において、この数字は「少ない数字ではない」との指摘があり、社会に開かれた教育課程を実現するための一歩として、今年度新たな取組を実施した。

授業参観時に教育課程名、単元名、授業の見どころ（評価のポイント）等がわかる「授業参観ガイド」を作成し、保護者に配布した。まずは保護者と教育の目的を共有しながら活動を展開することで、学校内だけで通じるものではなく、社会と教育の目的を共有するにはどうしたら良いかを検討した。

「参観アンケート」は、一番近くにいる地域社会の方の意見と捉えて実施している。また、保護者による授業の評価は、児童生徒の変容の姿であると考えている。

「参観アンケート」の結果は以下のとおりである。

質問2「地域社会と連携した授業に取り組んでいることがわかる授業でしたか」や、質問3「子ども達が地域社会で生活する力をつけるために必要な授業でしたか」において、「あまり思わない」「ほとんど思わない」の回答が目立つ。また質問4「特別支援学校でどのような授業を行っているかがわかる授業でしたか」においても、「あまり思わない」の回答もある。



本校では全ての家庭に該当学部の学習指導要領と、文部科学省が作成した周知・広報のための資料（リーフレット）を配布し、新しい学習指導要領の趣旨や、特別支援学校における授業の目的や内容についての理解を進めているところである。

今後さらに、地域社会と連携協働した授業の目的と内容についてわかりやすく伝えることと、授業改善・教育課程改善というカリキュラム・

マネジメントの二点において生かしていく必要があると考えている。

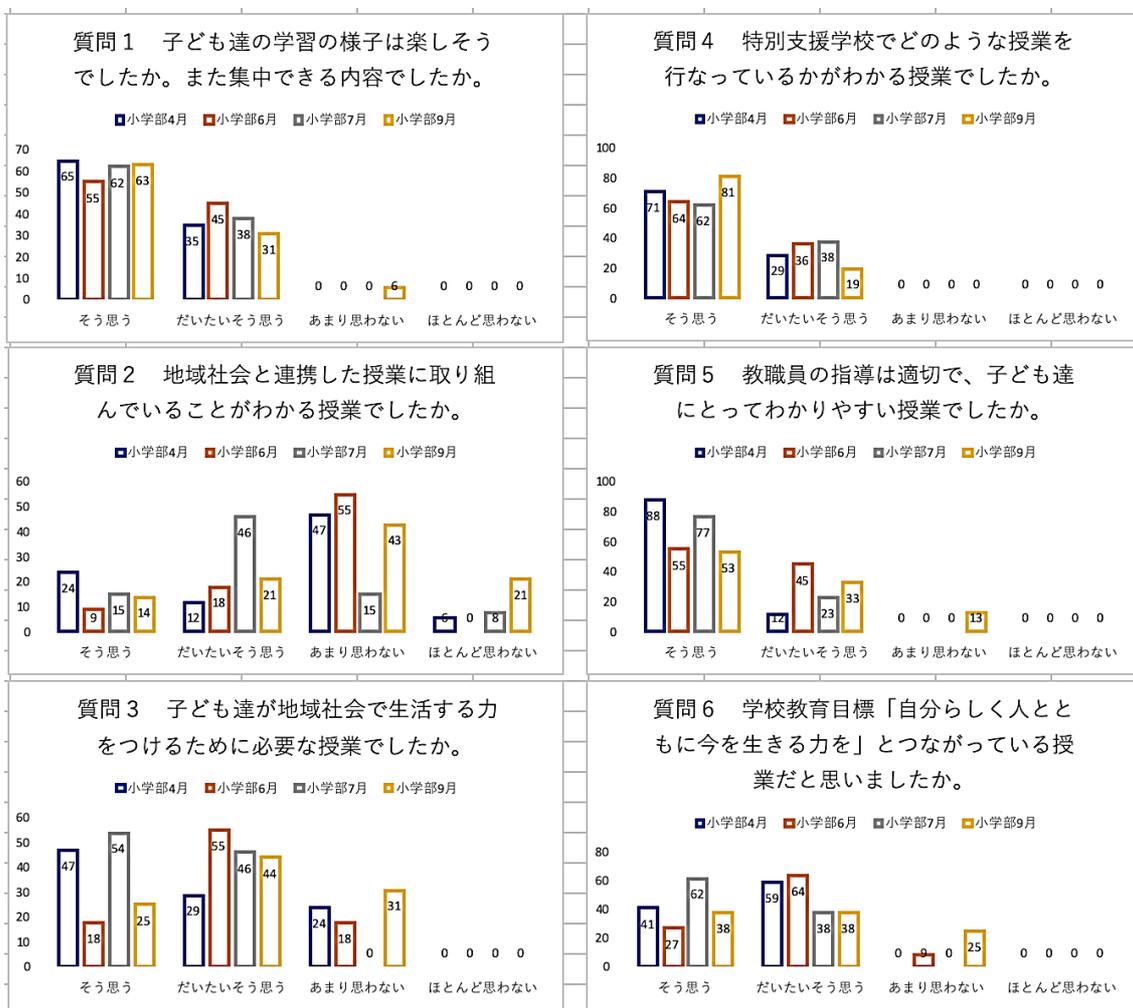


(3) 参観アンケートの自由記述欄から、課題となる点

- ・授業中の待ち時間が多い。もう少し子どものやる気を出せる関わりをしてほしい。
- ・生活の力、生きていくための力がどこで取り組まれているのか。
- ・今の授業内容では本当に生き抜くための力にはまだまだ程遠く感じた。伸ばせる力や能力はもっとあるはずなので、さらに進んだ学習に取り組んでほしい。学校教育と社会との隔たりを感じてしまう。

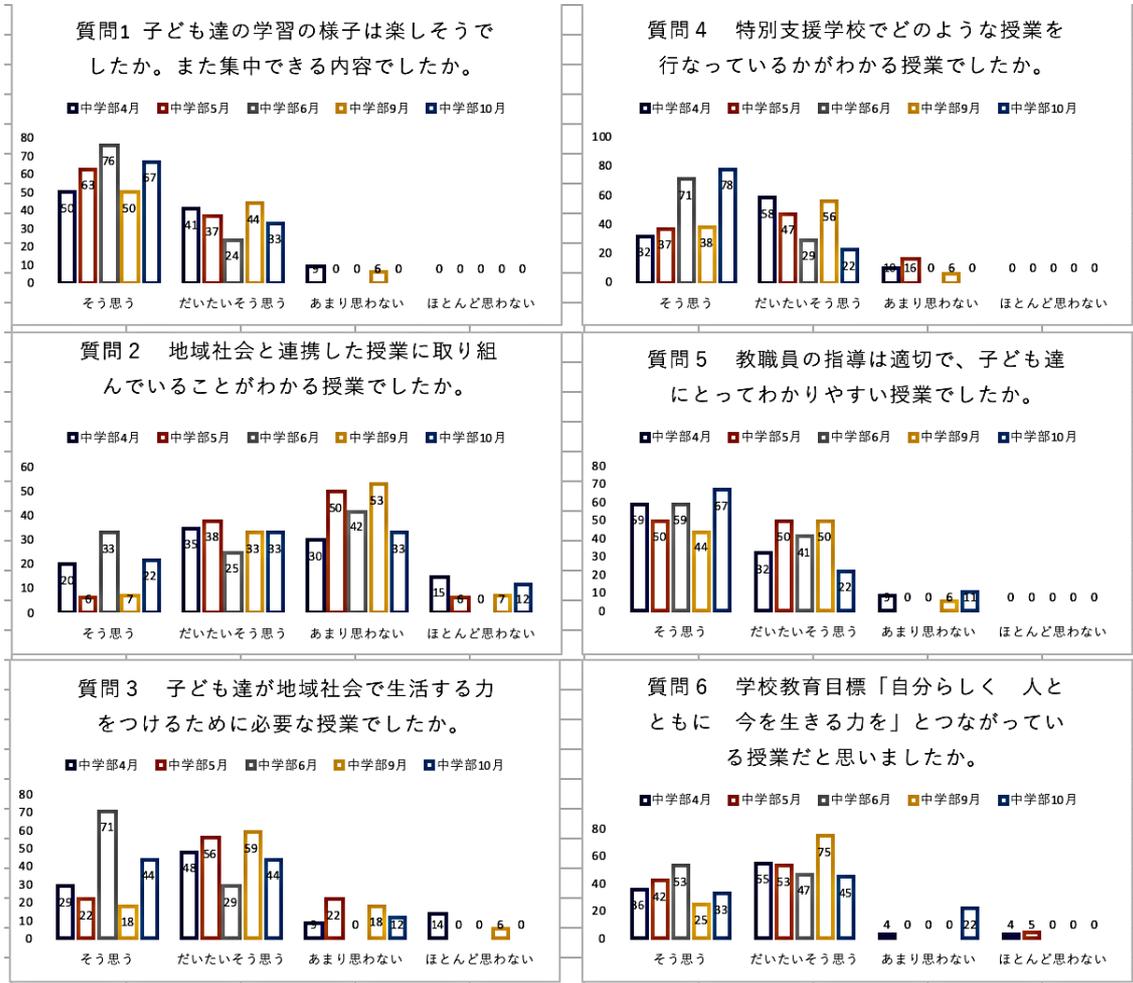
<参観アンケート結果>

小学部4回の参観から



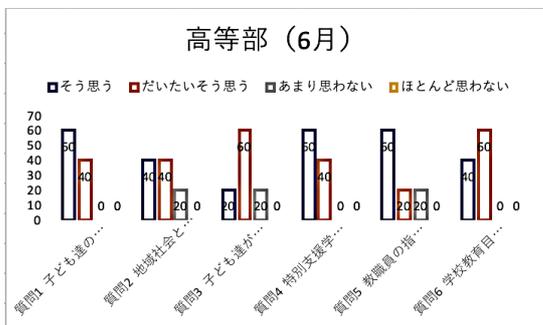
< 参観アンケート結果 >

中学部 5回の参観から



< 参観アンケート結果 >

高等部 1回の参観から



(4) 研究目的の達成について

ア 研究の成果から得た結論

①障害のある児童生徒の社会貢献を実現する、地域社会と協働した教育活動の在り方について

- ・地域社会の方と協働した活動を視野に入れて単元を計画し、指導を積み上げることをとおして、地域社会の方に児童生徒が学習でつけた力やさらなる可能性について知ってもらうことから、障害のある児童生徒に対する共感的、肯定的理解が広がる。
- ・地域社会の方と協働した活動をする際は、授業の目標を地域の方と丁寧に共有し、役割を意識しながら一緒に活動をすることで、地域社会の方が授業の目標達成の一躍を担うこととなったり、共生社会の実現について考えたりする重要な機会となる。
- ・地域社会の方と協働して活動する場面で力を発揮できた経験は、学校内での活動以上に児童生徒の達成感や役立ち感につながる。これを繰り返すことで児童生徒はさらに意欲的に取り組めるようになり、任された役割に責任がもてるようになる。

全校の実践から、以上のような地域社会と協働した教育活動が、多様な児童生徒の社会貢献を実現すると考えられる。

②社会貢献を実現するための指導の在り方について

- ・「わかった」「面白い」と思える授業や、友達と一緒に考え、目標を達成する授業である。
- ・児童生徒自身が学習を振り返り、改善したり次に生かしたりすることができる授業である。
- ・できたことが児童生徒自身の喜びとなり、授業以外の場面でもその力を発揮できたという達成感を育む設定がある。
- ・誰かの役に立っていると感じられる経験が繰り返し設定されている。

研究協力者からの指導助言等から、以上のような指導が児童生徒の社会貢献を実現させる指導の在り方であると考えられる。

③社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

- ・地域社会と連携し、地域社会の一員としてよりよい学校教育を目指す考えがある。
- ・年間をとおした目標設定をし、単元設定に系統性があり、教科・領域等の相互の関連がある。

- ・児童生徒が見せる姿から振り返る授業改善を繰り返しながら、指導方法だけでなく目標設定、教育課程を卒業後の視点から見直す。
- ・1時間の授業と、実際の生活で生きて働く力、経験したことがない状況にも対応できる力、学んだことを生かそうとする力がつながっている。
研究協力者からの指導助言等から、以上のようなカリキュラム・マネジメントが児童生徒の社会貢献を実現するカリキュラム・マネジメントであると考えられる。

④特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

- ・学校教育を通じてよりよい社会を創るために、地域社会と連携協働する組織を位置付けると共に、自分らしく精一杯力を発揮している児童生徒の姿を地域社会に伝える様々な工夫を行う。
- ・保護者や地域社会に学校の教育目標を示し、教育課程をわかりやすく説明し、評価を得続け、改善するPDCAサイクルを実施する。
- ・全校で授業改善研究、教育課程研究に取り組み、社会に開かれた教育課程を実現する。

これまでの全校の実践から、以上のような学校経営が地域社会と連携協働した学校経営の在り方であると考えられる。

イ 研究目的の達成について

○地域社会と連携協働した教育活動を展開し、教育の目的とするところを共有することとおして地域社会のなかに、特別支援教育や障害のある児童生徒の能力や可能性について共感的な理解が広がっている。

地域社会の方と共に授業に取り組むことによる児童生徒の変容はこれまで述べたとおりだが、地域社会の方にも変容が見られた。特別支援学校の児童生徒と初めて接するという地域社会の方は当初、「これまで接したことがないから想像もできなかった」（学校ボランティアの会 Aさん）、「もっと言うこと聞かずに走り回ったりするのかなという印象」（乙訓消防組合長岡京消防署 Bさん）とのことだったが、一緒に活動することで「今の気持ちは喜び」（Aさん）、「いろんなことに興味をもってもらえた」（Bさん）、「伝え方等を先生方から学ばせていただいた」（乙訓消防組合長岡京消防署 Cさん）との感想のとおり、特別支援教育について、少しずつ理解が広がってきたと感じる。

継続して複数回一緒に活動している地域社会の方は、「たった一人の子が『良かったな、嬉しかったな、楽しかったな』と思ってくれること。それ以外には何もない」（長岡京市環境の都づくり会議 Dさん）、「子ども達が喜んでくれたらそれが最高の喜び、私にとっての最高の喜び、その喜びがほしいだけ」（長岡京市環境の都づくり会議 Eさん）、「初めは指示を仰ぐにしても固まってしまったような子達も、ちゃんと確認をしてくれるようになってるし、回数を重ねると動きもすごくよくなっている」（花いっぱいボランティア Fさん）、「ついつい『あれ』『あれ』と言ってしまうけど、初めての子にはわからないと思って具体的に言ったらすぐ動いてもらえる」「子ども達は作業の段取りに慣れてきて、徐々に積極的になってきている。口数も増えて日常会話もしてくれるようになったし、すごく成長していると思う」「笑顔が増えて、笑顔で作業してくれているし、素直ですごい」「やる気をもって来てくれているのが確信できた」「こっちもテンションが上がって、同じ作業をしていても楽しくなってきた」（花いっぱいボランティア Gさん）というように、障害のある児童生徒の能力や可能性について共感的な理解が広がっている。そして教育の目的とするところを共有し、喜びをともにする授業が実現している。

○上記の目的を達成するために、授業改善に取り組むことから、多様な児童生徒一人一人に共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための力を育むことができている。

地域社会と連携協働する教育活動を積極的に展開し、授業改善に継続して取り組んできた。児童生徒にはそれぞれ、障害からくる経験不足、コミュニケーションの難しさ、操作性や運動面での難しさ等の課題がある。しかし各学部の実践報告のとおり、地域社会の方と協働した活動を視野に入れて単元を計画し、授業改善を繰り返すことで、わかることが増えたり、人との関わりが増えたり、社会性が発達したりする等の変化があった。地域社会の方と協働して活動する場面で力を発揮できた経験を繰り返すことで児童生徒はさらに意欲的に取り組めるようになった。

共生社会とは、すべての人がそれぞれの良さを生かしながらつながり合う社会であり、その共生社会を構成する社会の一員として豊かな人生を送っていくための力とは、自分なりに社会貢献する力と考えられた。

自分なりに社会貢献する姿とは、自分の得意な役割で友達の役に立つことであり（小学部の例）、スーパーで店員さんとのやりとりを楽しみながら、家族に頼まれた買い物をすることであり（中学部の例）、与えられた仕事に責任をもって果たし、相手に安心して仕事を任せてもらえること（高等部の例）であった。

○これらをとおして、共生社会が理念だけではなく実感をともなったものとして広まってきている。

継続して本校と連携協働している地域社会の方は、継続している理由について「自分の知っている知識でよければ、いくらでもいつでも提供させてもらう」「楽しんで学んでもらえたらありがたい」「ものづくりが好きで、子ども達とのつながりも作ってもらえたから、私にとっても最高の喜び。私の方が感謝している」（長岡京市環境の都づくり会議 Eさん）、「世の中に必要とされて、自分がここにいてやっていけばいいというのがわかれば、人生ってどれだけ楽しいかなと思っている」（竹・木工芸品等の製造卸会社 高野竹工 Hさん）と話されている。

地域社会の方自身が自分に何ができるのか、何をすればよいのかを考えてくださっていることから、理念だけではなく実感をともなったものとして共生社会についての考えが広まってきていることが感じられる。

ウ 研究の成果から得た結論について（研究報告会参加者からの評価）

①障害のある児童生徒の社会貢献を実現する、地域社会と協働した教育活動の在り方について

地域社会の方と協働した活動を視野に入れて単元を計画し、指導を積み上げることをとおして、地域社会の方に児童生徒が学習でつけた力やさらなる可能性について知ってもらうことから、障害のある児童生徒に対する共感的、肯定的理解が広がる。

- そのとおりであると思う。地域社会の方との協働の場では win-win になるには時間がかかるが、協働の機会を増やしていくこと、地域社会と学校の意味づけに児童生徒の価値が生み出されていく。（教育関係者）
- 地域社会の方がおっしゃっていた「わりと（できた）」「意外と（問題なかった）」の言葉。いざ接してみると、双方に垣根がなくなるというか、先入観にとられて距離置くということではなく、少しのきっかけづくりで地域とのつながりがもてると思われる。（教育関係者）
- 地域社会の方と支援学校内の方に、子ども達を見る目の違いがあったようだが実際に交流をもつことで双方に変化があったことから、互いに役割をもち、自分らしく生きるためには学齢期から地域社会と関わることで将来的にも地域で暮らしやすくなると思った。（大学生）
- そのとおりだと思う。地域社会の方の力をたくさん借りて、学校の教員ではさせてやれない体験をさせていくことが大きな教育力になると思う。（教育関係者）
- 児童や生徒が主体的に活動に参加し、楽しみながら行うことで、また教師が目標をもち、地域社会と連携することで実現可能である取組であると感じた。また、実現している映像を観て、すごいと感じた。（大学生）
- 誰もが自己肯定感をもてると生きる意欲がわいてきて、主体的に幸せになれると思う。地域の理解があってこそその共生なので、素晴らしい取組だと感じた。（教育関係者）
- 学校のことをどんどん発信して共生社会につながれたらと思います。校外で活動することで、より達成感や学習意欲が深まると感じます。（教育関係者）
- 障害者が当たり前のように生きていく。地域社会の方に児童や生徒と触れ合ってもらい、知ってもらうことが共生社会の実現につながっていくのだと考えました。（地域住民）
- 日本の社会から差別と偏見がなくなると、障害者は社会と共生していけない。まずは健常者、障害者の線引きをなくし、地域社会との交流がいかにより必要かつ重要であると思う。大変良い結果をもたらしていたと思う。（地域住民）

地域社会の方と協働した活動をする際は、授業の目標を地域の方と丁寧に共有し、役割を意識しながら一緒に活動することで、地域社会の方が授業の目標達成の一躍を担うこととなったり、共生社会の実現について考えたりする重要な機会となる。

- 目指すべき姿を実現するために、学校と地域の相互理解がとても大切だと思う。そのためには学校としての理念をしっかりともち、共有すると同時に、教育する側として、教育活動の押し売りにならないように留意して、教育を展開することが大切だと感じた。また、子ども達の障害そのものへの理解が広げられるといいと思う。（教育関係者）
- 活動を共にし、共感し合うことで、児童や生徒と地域社会の大きな成長につながると思う。（教育関係者）
- 地域社会の方に、教育目標を理解してもらい、同じ方向に共に進んでいくことで、意味のあるものになると思った。共に喜ぶ空間ができるといいと思う。（教育関係者）
- 授業の目標を地域社会の方と丁寧に共有していくことが最も重要だと感じた。（教育関係者）
- 児童生徒が地域社会と活動の目的を共有し、また地域社会のニーズに様々なかたちで応えることは地域社会に貢献できることにつながると思う。地域社会で活動することで認知が高まり、児童や生徒がその地域にいることが当たり前となっていく。共生社会の形成の一躍を買っていると感じる。児童生徒が実感することで、達成感や役立ち感にもつながると思う。実践を振り返りながら、校内に閉じず、社会に開き、地域社会の場で、地域社会の方々とともに活動することは、児童・生徒にとっても可能性を無限に広げることになると確信している。（教育関係者）

地域社会の方と協働して活動する場面で力を発揮できた経験は、学校内での活動以上に児童生徒の達成感や役立ち感につながる。これを繰り返すことで児童生徒はさらに意欲的に取り組めるようになり、任された役割に責任がもてるようになる。

- 子ども達が地域社会のなかで生きていく理想の姿のひとつになっていた。（教育関係者）
- 卒業後、一社会人として自立できることを目標に指導願いたい。（福祉関係者）
- とても大事なことと思う。地域社会の方の声を聞き、一緒に活動することがきっと地域社会の方にとってもプラスになっていると感じている。この先もずっと継続していったら、きっと、もっとつながりが強まって、地域が学校を中心にまとまっていくのではないかと思った。（教育関係者）

- ・研究成果について、納得できた。あとは、地域との協働した活動が一過性の行事にならず、繰り返されることが大切だと考えた。（教育関係者）

②社会貢献を実現するための指導の在り方について

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・「わかった」「面白い」と思える授業や、友達と一緒に考え、目標を達成する授業である。・児童生徒自身が学習を振り返り、改善したり次に生かしたりすることができる授業である。・できたことが児童生徒自身の喜びとなり、授業以外の場面でもその力を発揮できたという達成感を育む設定がある。・誰かの役に立っていると感じられる経験が繰り返し設定されている。 |
|--|
- ・児童生徒の将来まで見据えたキャリア教育の視点だと思った。（教育関係者）
 - ・「わかって、できる」「おもしろい」と感じながら、また自身が有能感をもち、「誰かの役に立つ」ことは人として豊かな気持ちが育つと思う。（教育関係者）
 - ・面白いことは大事だがそれは「何のためにどんな力をつけるために」といった視点は欠かせないと思う。（教育関係者）
 - ・わからないと自主的に動けないが、児童生徒が自分たちで考える手立てがあり、最終的には「自力でできた」、さらには「誰かの役に立った」という達成感を味わえることが、本当の意味で児童生徒自身の力になると考えた。（大学生）
 - ・社会貢献はお互いの気持ちが成立することだ。しかし、「ありがとう」、「助かったわ」という言葉、子ども達はとても喜ぶ。相手の方に心から思っただけいたら嬉しい。（保護者）
 - ・日々、教職員の生徒への深い関わりの上で、明確な設定の上で、授業や指導が行われていることがわかった。（無記名）
 - ・児童生徒の変容が裏付けになっている。（教育関係者）
 - ・「わかる→動ける→できた」という自己肯定感を上げるために必要だ。（教育関係者）
 - ・4項目すべてが重要であり、行われることが教育だと考える。やって終わりではない教え方がそのとおりだと感じた。（大学生）
 - ・授業に向けた意欲をどうもてるようにするのが大切だと感じた。（教育関係者）
 - ・児童や生徒の社会貢献を実現させる指導のあり方、4項目、すべて授業に大切な視点だと思う。（教育関係者）
 - ・児童や生徒の意欲を高めることが次の成長につながっていき、それが社会貢献の実現につながっていくと思う。（教育関係者）
 - ・貢献とは何なのかを常に考えている。障害があっても、障害の程度ではなく、誰

でも誰かの役に立つと実感できる活動は多くあると思う。「自分なり」という言葉がまさにそのとおりである。その積み重ねが、児童生徒自身が様々な場面で「自分もできる」といった気持ちで意欲的に取り組む姿勢が見られると思う。さらにそのことが、一人一人が社会で活躍し、社会に貢献できる人になることにつながると思う。(教育関係者)

- ・ただ「教える」ではなく、「自分で考える」という重要性、小学生でもできることがある。「できる」に目を向ける重要性を再確認できた。(福祉関係者)
- ・自分でわかったと感じるよりも、友達と話しているなかで「できた」ことに達成感を感じることは、社会貢献の第一歩であると思う。「役に立っている」ことがわかることは、自分の存在を認めてくれているということにもなるので、すごく大切なことだと思う。(大学生)
- ・もっと根本的ですがすでに当たり前のことと思われているが、何をもって「地域貢献(社会貢献)」とするか、そして、社会とつながることで、子ども達のQOLがどのように向上につながるのかという視点が一番不可欠だと思う。(教育関係者)
- ・「誰かの役に立っていると感じられる経験」については、相手から感謝されることから始め繰り返し取り組んでいくことが多いと思われるが、どんなステップを踏んで高次化させ役に立っている感覚まで育てていくのか、難しいことだと思っている。(教育関係者)
- ・すばらしいと思いました。児童生徒が生き生きとできる学校に。支援学校の良さを広げてください。(地域住民)

③社会貢献を実現するためのカリキュラム・マネジメントについて

- ・地域社会と連携し、地域社会の一員としてよりよい学校教育を目指す考えがある。
- ・年間をとおした目標設定をし、単元設定に系統性があり、教科・領域等の相互の関連がある。
- ・児童生徒が見せる姿から振り返る授業改善を繰り返しながら、指導方法だけでなく目標設定、教育課程を卒業後の視点から見直す。
- ・1時間の授業と、実際の生活で生きて働く力、経験したことがない状況にも対応できる力、学んだことを生かそうとする力がつながっている。

- ・地域社会との連携は、子どもがそこで根付き、豊かに過ごすために大切な取組だと思う。(教育関係者)
- ・地域社会との連携は、社会の考え方を変えるというところにもつながり、よいと思う。(教育関係者)
- ・年間、教科・領域等の関連付けをすることでよりよいものになっていると考え

る。(教育関係者)

- どのような学習でも横のつながり、縦のつながりの重要性、その単元で取り組む内容がその先にどのようにつながっているのかを考えることは必要であると考えている。(教育関係者)
- 今日の研究報告会で、地域の人々が特別支援学校の子どもと関わって、「喜び」となった言葉がすごく印象的だった。様々な人と関わりながら、自分をつくっていくという面でも地域との連携した授業は必要だと思う。(大学生)
- 授業改善を繰り返しながら、目標設定、教育課程を卒業後の視点から見直すことについて、教科・領域等関連表もしっかりと活用することで、職員が子どもの育ちをトータルでとらえる力を付けていくことができるのではないかと思った。(教育関係者)
- 年間をとおした目標設定、単元設定の系統性、教科・領域等の関連が授業をつくっていく側として特に大切になってくる。教育課程を卒業後の視点から見直すことはもちろん大切であるが、一番は「今ある力」、「今の生活の質」が向上できるように考えていくべき。それが結果として将来につながる。将来のことは誰にもわからない。(教育関係者)
- 目標、学習の関連性、つながり、そして、卒業後のイメージを常にもっておかないといけないと考えた。(教育関係者)
- 評価(できた、できない)に表れない内面の育ちについて。年間をとおした目標設定をし、単元設定に系統性をもたせ、教科や領域等と関連付けていくことは、地域社会は流動的であるため、難しくならないか。(教育関係者)
- 指導者の側からだけの評価でなく、子ども達が楽しかったのか、面白かったのかの評価も大事ではないか。(地域住民)
- 共に達成感や喜びを得ていることで子ども達が成長し、社会に貢献できる力を付けていくようになって感じた。(無記名)

④特別支援学校と地域社会との連携協働を実現する学校経営の在り方について

- 学校教育を通じてよりよい社会を創るために、地域社会と連携協働する組織を位置付けると共に、自分らしく精一杯力を発揮している児童生徒の姿を地域社会に伝える様々な工夫を行う。
 - 保護者や地域社会に学校の教育目標を示し、教育課程をわかりやすく説明し、評価を得続け、改善するPDCAサイクルを実施する。
 - 全校で授業改善研究、教育課程研究に取り組み、社会に開かれた教育課程を実現する。
- 地域社会の方が特別支援学校の児童生徒について「話も聞かず、走り回っている印象だった」と話していたが、この方に限らず、障害者を知らない人ならこ

のような先入観があると思う。実際に、教育活動のなかで出会って、児童生徒のもっている力を発揮する姿を他者に見てもらふことで、先入観も消されると考えるので、このような取組は必要不可欠であると学ばせていただいた。（大学生）

- ・「保護者や地域社会に学校の教育目標を示し、教育課程をわかりやすく説明し、評価を得続け、改善する PDCA サイクルを実施する」ことにより、学校が真の協力者を得ることにつながっていくのだろうと、研究報告会を見ていて感じた。学校は在籍の児童生徒だけでなく、地域社会の方々も共に成長していただければ、この上ない喜びになると思った。「自分たちが楽しいからやっている」とおっしゃっていた地域社会の方々には、まさに、知らなかった特別支援教育について「知る」「考える」ということをしておられた。（教育関係者）
- ・生徒自身が「できる」という意識、周囲の人が「あの子はできる子だ」という意識をもてるように、支えながら活動していくことで、本人も周りもやる気をもって活動できると思った。（大学生）
- ・地域と連携や協働して、児童や生徒の実態に合わせた弾力的な支援が大切だと改めて感じた。（大学生）
- ・障害がある人が地域に根差した生活をする（地域の人と多くの接点をもつこと）、そのものが地域社会への貢献であると思う。（地域住民）
- ・子ども達を変える、社会を変える、とても大切なことだが、そのためには、まず学校や教員が、新しい時代の流れを感じ続け、学び続け、変わり続けることが大切だと思う。（教育関係者）
- ・児童や生徒の生き生きとした姿と地域の人たちの笑顔が印象的であった。（教育関係者）
- ・地域社会に学校、児童生徒のことをどのように伝え、知らせるかを考えていくことが必要だと思う。そのための工夫や機会を学校全体として取り組んでいくことが大切だと考えた。（教育関係者）
- ・児童生徒の姿を地域社会に伝える様々な工夫を行うことについては、新学習指導要領にも含まれるものであり、学校経営や単元づくりなどに取り入れるべき視点である。（教育関係者）
- ・組織をつくる人や担当する人だけが意識をするのではなく、携わる全ての人を意識的に取り組まなければ維持することが難しくなってくると思う。これまでやってきたこと、児童生徒が変わってきたことを共有しながら、活動ありき、地域の人と何かをすればいいという考え方ではなく、何のためにその活動をその地域の方と共にすることで、どのような教育的効果が見られるかを考えながら、授業づくり、学校づくりをしていく必要がある。児童生徒の姿に加えて、地域社会の生の声（社会に与える影響を実感する）を聞き、授業を改善する、指導の充実の

好循環につながることはまさにそのとおりだと思う。（教育関係者）

- ・大切なことである。ただこの取組をどのように持続していくのか（形骸化しない）課題があると思う。（教育関係者）
- ・保護者や地域社会の人に教育課程を丁寧に説明していたり、一緒に学校をつくっているというのがよいと思う。（教育関係者）

エ 今後の方策（令和2年度から令和5年度まで）

本校では、

- ・新学習指導要領をさらに推進・具現化し、児童生徒の可能性を追求し共生社会の形成に貢献する学校
- ・明るく活気があり業務改善が進み、ライフステージに応じた多様な働き方を認め合い澁刺颯爽と働く教職員
- ・各取組の総力としての教育効果が高まっている学校

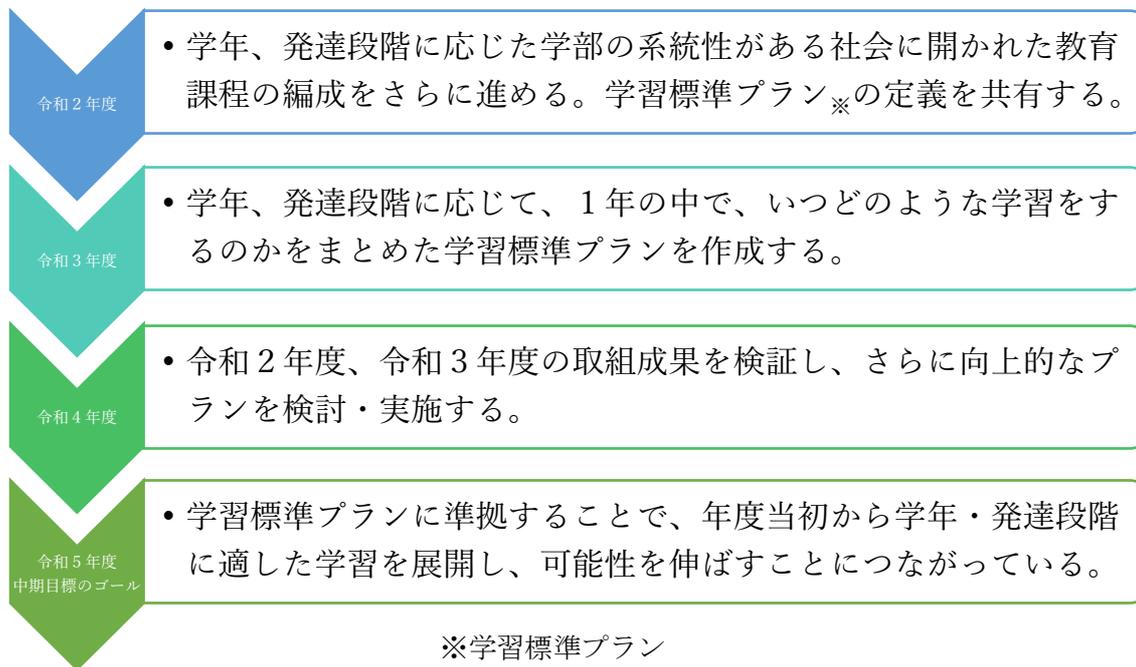
を目指し、令和2年度から令和5年度までのプランを作成した（「明日の向日葵が丘を創るための持続可能な PLAN と GOAL」通称「PLAN5」）。

このプランでは、「業務改善」と「質の高い授業」を両立させることを目指し、学校経営のなかに授業改善研究を位置づけている。

「PLAN5」における教育課程の改善・授業スタイルの見直しに関しては、以下（ア）（イ）のようにした。

これは「地域社会の方と教育の目的とするところを共有し、連携協働した『喜びをともにする授業』の実現が、障害のある児童生徒の能力や可能性についての共感的な理解を広げ、多様な児童生徒一人一人に豊かな人生を送っていくための力を育むことができている」という本研究の成果を継承するためのプランでもある。

(ア) 教育課程の改善



※学習標準プラン

年間指導計画や、授業の内容や進め方を示す計画書

(イ) 授業スタイルの見直し

